土産に頂き、鶴絃会皆様の斡旋により楽しい二日間の弾交会の終ったのを深く謝し十五時弁天島駅前で再会を約して散会した。

（平井春嶺記）

護国神社みたま祭に琵琶奉納　八月十六日夕七時から京都東山の霊山（りょうぜん）護国神社で日本民主同志会提供奉納芸能会が催され矢吹旭美津（鴨川の露）、植村寛水（新撰組）の外吟剣扇舞や舞踊など数番の神前献奏があり昼を欺く境内万燈のもと神霊を慰め且多数の一般参詣者を喜ばせた。当夜は京の夏の夜の風物詩如意ケ嶽の「大文字」をはじめ東西五山の左大文字、妙法、船形、鳥居形の送り火が八時から順次点火され護国神社の高台から之を歓賞する市民で賑った。

北海道神宮琵琶講　創立十周年記念の首琵琶吟道演奏大会　記が八月二十四日正午から札幌市大谷会館五階大ホールでNHKと日本コロンビヤKKの後援で開催され盛会を極めた。金剛石合奏＝室谷、安達、小野、天野、木村　恩馨の彼方＝小林濤水　湖水乗切＝阿部導水　羅生門＝安達弦水　坂本竜馬＝草薙覚水　あゝ結城先生＝中井岳風　坂崎出羽守＝天野偲水　白虎隊＝加藤夕水　羽衣＝小野蓉水　田村邸＝京都矢吹旭美津・田中鵬水　堅田落＝同梅原旭濤　横笛＝同植村寛水　寂光院＝同平井春嶺　城山＝広川岳楓　常陸丸＝木村長水　屋島の誉＝金子天香　シャクシヤイン＝渡辺飛水　広瀬中佐＝山崎紅水　俊寛＝内山鶴崇。外に吟詠吟舞剣舞三十二番。

納涼名韻会に琵琶演奏　八月三十日正午東京東横劇場に於ける第二六五回同会が開かれ若宮旭登女史「柳の精」の外長唄、新内、小唄、舞踊等十三番を公開好評。

中山鳳水演奏大会　九月一日昼大阪天神筋朝陽会館。白虎隊＝中山嬢水　良寛＝野間政水　川中島＝養老駿水　別れの盃＝宮之原聖水　石童丸＝中山鳳水　城山＝金寄靖水　毒饅頭＝近藤登水　西郷隆盛＝稲葉卓水　栗栖＝谷津壮水　吉野落（下）＝藤原英水　本能寺＝奥村憲水　厳流島＝小川吟水　竜の口＝東京谷暉水。

京都琵琶協会九月定例茶話会　九月一日（日）一時会員矢吹旭美津女史宅で開催。二百十日の厄日で十六号台風の直撃を受けるかと案じられたが幸いに大した事もなく北海道旅行の報告や十一月十七日開催予定の秋季演奏会の出演順抽籤や曲目選定などをし戸田（藤戸の渡）、牧（石童丸（上）、水内（同（中））、木村（同（下））、平井（小松の操（二）、植村（富樫の涙）の研究発表があり夕食後散会。出席者＝戸倉旭嶺、戸田旭公、田中鵬水、梅原旭濤、矢吹旭美津、安住旭康、牧南水、古谷竟水、木村維水、水内鍵水、平井春嶺、植村寛水。外に旭美津会富山・細川・村上、旭濤会相良・山崎諸氏。

三位研修同志会第十六回例会　九月七日一時三鷹市上連雀地区公会堂。結成三周年を迎えての挨拶＝伊集院皷城　月夜の良寛、羽衣＝山本隆水　門琵琶、お江戸日本橋、異国の丘＝山崎錦幽　花紅葉＝伊集院皷城　城山＝田戸桜丸　千曲川＝杉山雅俊　葉児＝篠宮櫻水　竜の口＝杉山桜正　山科の別れ＝中村修水　元寇＝清水源城。尚次回例会は十月十二日午後一時同所に於て開催。

菅沼響水氏　錦心流一水会名古屋前支部長の同氏は昨冬来闘病中の処七月十八日直腸がんのため逝去。謹んで御冥福を祈る。

―（予　告）―

○…京都琵琶協会十月定例茶話会　十月五日（土）午後一時、会員平井春嶺氏宅

○…筑前琵琶旭会全国大会　十月十九（土）、二十（日）両日福山市民会館

○…三ッ和会演奏会（梅原旭濤、矢吹旭美津、平井春嶺三門下生の会）十月二十七日（日）正午、京都東山安井金比羅宮会館

○…三浦蓮水会琵琶吟詠詩舞大会　十月二十七日（日）正午、西宮市夙川公民館、松下ホール。各流派東西名手数氏来賓出演、蓮水会主は琵琶本能寺、詩吟大楠公、詩舞吟小楠公の母を提供。尚当日は女性三人を含む五名の奥伝披露演奏がある。

あとがき

爽かな中秋の好季節となった●いつも同じような云い訳で恐縮だが今月号も又予定していた辻旭城、坂本錦道、普門義則各先生らの貴重な御寄稿を載せる事が出来ず御執筆の先生方に申訳なく思っている●読者諸彦、どうか次号を御期待頂きたい●各地演奏会の様子や琵琶関係行事の予告等をもっと詳しく報道して欲しいという希望が数氏から寄せられている●どんな些細なことでも結構、紙面の許す限り詳報したいと思う、精々筆まめに御連絡下さい。

昭和四十九年十月一日発行（非売品）
編集者　植村寛水
発行所　京絃社
〒569　高槻市津之江北町一一ノ二三
電話　〇七二六（八五）六〇五一番

琵琶機関紙　京絃
第二四三号　京絃社

断絃私語（一）

生重

いのちを賭けて死ぬの生きるのとあれ程騒いだ娑婆での人事も、ものゝ十年か二十年も経てばけろりと忘れて了う儚ないものであり、それはしよせん若気の至りの底の知れたものでした。

然しあなたと云うあやしい女神に魅せられた私達は古稀の坂をすでに越え、哀れ声も嗄れてしまったと云うに尚あなたを抱いて青春の日の夢を忘れ得ぬと云うのは何故でしょうか、私もすでに絃を断ったと云うのに尚未練らしく何時迄も老いの嗟語を繰り返している悩ましき無明長夜はどこ迄続くことでしょうか。

琵琶は滅んだと云う気の早い者に対して「この人の琵琶を聴け」と反論することが出来る「この人」達はすでに故人となり、僅かにその名声をとゞめているに過ぎない。思えば生き永らえてこの凋落を見るよりは全盛時代に華やかに散った人達の方が幸であったかも知れない。

退潮に向った琵琶を再び昔の夢に返そうとするならば今、私達はその古井戸の水を汲み替えなければならない。古い水をかえずして新しい水を求めることは出来ない、一世紀に亘る古井戸の水が濁っているかどうか、その水の色を見、その臭いを嗅いでみれば誰にでもわかる。そしてそれは汲み替えの時機が来ていることを私達に知らせているのです。

芸道の盛衰は故なくして偶然に起るものではない。衰う可くして衰え、滅ぶ可くして亡ぶ。それは単なる感傷でもなければ又誹謗でもなく冷厳たる現実です。たゞ時代の変化、流行によって一時衰退している様に見えるが、時到れば再び、と云う安易な考え方は非常に甘くまた幼稚です。

創生期の琵琶がこれから完成して行こうとした途上に於て、幸か不幸か流行と云う大きな荒波に揺られて自らの進路を見失ったと云えないでしょうか。流行とは本来の価値以上、法外に高く評価された現象であり、時流を越えて生き続けるものこそ本物です。真の芸術は困窮苦難の時代に生れるものだと云う皮肉な宿命を私達は背負わされている。私達は過去に於てその流行に自ら溺れ、そして芸の類型化はその内容を次第に低下さして行き、遂にその生命をも見失おうとしています。

こゝ数年来、「京絃」は常にこの問題を取り上げ続けて来ました、多くの琵琶愛好の識者は皆これを憂慮されていますが、当面の琵琶人にはその危機感は全く感じられなく、いみじくも誰かゞ予言した様にその虚名と小さな縄張りの中に身を投じて、戦国乱世より末世えと滔々としてその流れは止まるところを知らない。そして心ある者は黙して何も語ろうとしなくなった。

かって特殊階級のものであったと云う平家琵琶の末路が今日の様相を呈し、明治と大正を通じて大衆芸能として栄えて来た私達の琵琶が又その軌を一つにしようとしていることに無関心ではあり得ません。琵琶が文化財と云う聞こえの良い名を冠せられてあの世に葬り去られない様、私も亦声を大きくして叫び度い一人です。

京絃社が琵琶のもっとも苦難な時代に二十年と云う永い歳月を私達の為に、よく芸苑の燈火を絶やすことなく献身的努力を続けて来られた限りないその情熱に対して私は深い感激を覚え、心より感謝の意を表し度い一人でもあります。

狂酔亭漫録（第百四）

大坂落城異聞（四）

古谷竟水

現在の大坂城大手門から天主閣に通ずる道路脇には、人家より大きい巨石が石垣に併列している。特に大きい石は何萬貫もあるであろう。現今の土木専門家の話によると最新式の起重機や牽引車を使用しても、機械の力が負けて石は動かないだろうとの話である。

実際に築城当時、如何にして此等の巨石を運搬したかは判らない。併し伝説によると、此等の石は夫々西国方面の大名方の寄贈品で船積で大坂に運ばれ、大半は安治川南岸に陸揚され、特に大型の石は陸上で橋の通過が不可能なので、巨木の大筏を組み之を船の両脇に連結して浮力を増強し、今の大川南岸即ち八軒家辺まで水上で運び、陸揚したと伝えられるが真偽の程は判らない。

兎に角安治川で陸揚げの際、失敗して水中に落した石も多く、現今でも安治川の底には多くの巨石が沈んでいるとの事で、夫々寄贈大名の家紋が刻してあるので調査をすれば詳細が判明することであろう。

陸上の運搬はコロと称する丸太材を並べてその上で石を引つ張る方法で、数百頭の猛牛を使って牽かしたとの事で、当時としては人智と人力の極限を利用した難作業であった。

その宰領は秀吉麾下の名将で、且つ竹馬の友でもある加藤肥後守清正その人である。豊公拝領の緋羅紗の陣羽織の背には金糸で縫取ったる五三の桐の紋所、烏帽子型の兜には蛇の目の紋打つたるを頂き、御自慢の長髯を風に靡かせつつ石運びの采配を揮つた清正の姿は絵にも描きたい程頗笑ましい情景である。

さて秀頼誕生後数年を経過し、秀吉も齢既に六十に達し、健康も近来頓に思わしからず自分亡き後は秀頼も幼少の事とて、流石蓋世の英雄秀吉も豊臣家の命運を憂慮し有力大名の中から五人の奉行を選任し後事を托した事は史上著名の事実であるが、此の五奉行連署の大坂城壁書（現在の掲示文の如きもの）なる文書が残存して居り、之には太閤薨去三年前の日付あり、大体秀吉の意志によるものと思われ、且つ当時の武家作法風習等を知る上にも重要なものなので、原文の漢文体を普通の文体に訓読して左に記載する。

大坂城壁書

一、諸大名縁辺ノ儀ハ御意ヲ得タル其上ヲ以テ申シ定ム可キ事

一、大小名（二字不明）ノ契約誓紙セシムル等ハ堅ク御停止ノ事

一、自然ノ喧嘩口論ニ於テ勘忍致スノ輩ハ理ノ運ビニ属ス可キノ事

一、無実ノ儀申上ル輩之レ有レバ双方召寄セ堅ク御糺明遂ゲラル可キ事

一、乗物御赦免ノ衆ハ家康利家景勝輝元隆景並ニ古公家長老出世ノ衆ニテ此外ハ大名ト雖モ若年ノ衆ハ騎馬タル可ク年令五十以後ノ衆ニテ路次一里ニ及ブ者ハ駕籠ノ儀御免成サレ候当病ニ於ケル者是又駕籠御免ノ事

右ノ条々違犯ノ輩ニ於テハ厳科ニ処セラル可キ者也

文禄四年八月三日

隆景　輝元　利家　秀家　家康

御掟追加

一、諸公家諸門跡衆ハ家ノ道ヲ嗜ミ公儀ノ御奉公ヲ守ラル可キ事

一、諸寺社ノ儀ハ寺法ヲ先規ノ如ク相守リ専修ノ学問励行ハ油断致ス可カラザル事

一、天下領知方ノ儀ハ毛見ヲ以テノ上三分ノ二ハ地頭三分ノ一ハ百姓之ヲ取ル可ク兎角田地荒レザル様ニ申シ付ク可キ事

一、小身ノ衆ハ本妻ノ外ニ遣イ者（妾）一人ハ召置ク可ク但シ別ニ家ヲ持ツベカラズ大身タリト雖モ手懸者（妾）一両人ニ過グベカラザル事

一、知行分限ニ随イ諸事進退相働ク可キ事

一、直訴致ス可キ儀ハ公事ニ於テハ目安者先ニ十人ノ衆ヘ申ス可ク十人ノ衆ハ訴人の儀ヲ馳走（取調）サレ一双方ヲ召寄セ糺ニ申分ヲ聞カサル可ク談合ノ上ヲ以テ御耳ニ入ル可キ儀ニ於テハ申上ゲラル可キ事

一、衣裳ノ紋ハ御赦免ノ外ニハ菊桐ハ之ヲ付ス可カラズ御服拝領ノ者ニ於テハ其ノ御服所持ノ間ハ之ヲ着ス可ク染替テ別ノ衣裳ニ御紋ヲ付ク可カラズ候事

一、酒ハ器（当人の酒量）ニ随イ但シ大酒ハ

御制禁ノ事

一、覆面往来ノ儀ハ堅ク御停止ノ事

右ノ条々違犯ノ輩ニ於テハ厳科ニ処セラル可キ者也

文禄四年八月三日

隆景　輝元　利家　秀家　家康

さて此の壁書の中に紋章の事があるがこの機会に太閤桐の紋章に就て一寸説明する。

私の古い友人に三宅顕山という老書家があった。元来大阪島之内の古典書肆の主人であったが夫人が著名な産婆であったので中年から書店を廃業し楽隠居の身の上で、書道の他にも多才で物知りで粋人で又奇人でもあった。例えば毎日の朝飯は茶漬でなく熱燗の酒漬であったし、若い頃からの手足の爪は別々に缶に入れて保存されていた。又好奇心も強く、年中を通じ早朝高津神社へ朝詣りするのだが途中に飯酒盃という珍らしい姓の表札を見てどうも読めないので遂に其家を訪れイサハイという読方を教わる程の熱心さであった。

此の三宅氏は衣裳にも凝り、家紋の事等はよく研究していたが所謂太閤桐と称する秀吉愛用の紋章を各種紋帳を比較して見ると皆少し宛相違するので此の人は例の癖を出し、豊太閤遺構の建造物に付けられた桐の紋ならば必ず極め手になるものと推定し、京都の西本願寺鴻之間、唐門、豊国神社の正門、江州竹生島神社の拝殿、さては横浜三溪園原氏別邸にある淀君化粧の間等の実地を見学し、瓦類や欄間彫刻や金具等にある桐の紋章を写真に撮って詳細に比較して見ると、驚いた事には皆多少宛相違していて、桐の葉の形も違い、葉脈の数も形も違い、上部の花の部分も五三であったり七五であったり、陽紋であったり陰紋であったり、結局太閤桐という紋章は何れが正当の物か判らない結果となった。

恐らく太閤という人は、桐でさえあれば何でもよろしい位の無頓着な考えであったらしく、此の茫洋たる風手こそ秀吉の大器たる所以であったのであろう。

（以下次号）

我が道を行く　六十五年（二〇）

西郷天風

明治大正時代の銀ブラに経験を有つ御仁は誰しも御存じに違いない筈の、英国風も誇らしく人目をひいた総ガラス張の大商館、それは銀座通り四丁目の新橋方面に向ってひだり角、間口凡そ七・八間、奥行は裏通りに達する二階建て、その赤練瓦造の二階には異国の風韻豊かな窓飾も珍しく、石材造りの一階は高さ三米余、巾二米にも及ぶ、明治時代としては想像に絶する巨大な一枚板のガラス数枚を、ウインドー風に張り廻らして見るからに清楚な建築の粋を偲ばせ、中央の豪奢な出入口を挾んだ双方のウインドー内には、宮内官の大礼服を着用した六尺豊かな人形が、ゆるやかに回転しつゝ人目をひいておる。それが明治七年に建造され、明治天皇御召の大元帥の軍服を始めとし、宮中の洋装一切を承る洋服商館〝大民〟であった。

そのガラス張の角を左に行けば裏通りに近く、二枚のドアを入口とした洋室が東林鉱山の営業所で、グラファイト（黒鉛）を扱う日本唯一の商社だった。

或朝新入社員である私は、挨拶かたがた出勤すれば、そこには大民の主人であり東林鉱山の社長の山岸為吉氏と、重役格の紳士一人のほかに、おそろしく頭のデッカイ小僧が出たりはいったりしておるだけの静かな事務室であった。

社長山岸氏は頗る上機嫌で、重役格の紳士を私と双方の引合せがすむと、饗応の茶菓をつまみ乍ら曰く、〝これで我社には、三郎が三人になった、その一人は先年おかくれになった海軍大将の宮様の家従だった星野三郎、それに琵琶師の三郎、もう一人は洋服屋の小僧の三郎、なんと面白い取合せではないか、まあよろしく〟と。其翌日から毎朝出勤の挨拶に顔を出すだけが私の日課で、あとは帰って琵琶に精進しておればそれでよい誠に呑気な社員である。

偶には芝浦製作所や、小石川音羽通りの講談社隣りにある鉛筆工場等へ集金に出かける事がある位のものだった。

大体このグラファイトは、熔鉱炉に無くてはならぬ重要な鉱物で、朝鮮の東林にある鉱

山の所有主山岸氏は、其所から産出する黒鉛（グラファイト）の大半を横須賀海軍工廠に納入しており、時の工廠長団琢磨氏は星野三郎氏が海軍大将の宮の家従時代からの関係で、その交渉は絶対的のものだった。

尚この黒鉛は如何なる高度の磨擦にも熱を発することのないのに着目し、社を揚げて苦心の結果遂に回転機の軸受用潤滑油として、東林グリースの完成をみたのも忘れ得ぬ思出の一つである。

その他今日印象に残る二・三のものをあげるならば、当時上流社会に知られた書家、貫名海屋の書軸のことで、時の逓信大臣箕浦勝人氏を小石川の私邸に再三訪ねたことや、ある宮家のお邸に帛紗包の書状をお届けに行けば、それが私の人物をテストする為の手段だったり、又別の宮家の御邸に使した時の如きは、私より一足先に御門内にはいった商人風の男が、正面の洋館を左にして先方に見える平家を指して行く其時、門をはいったら左に行く筈の私は、うかつにもその男の後を追って右の方へいってしまった。彼はそれを気付いてか内玄関の格子戸を開け放したまゝ上りかまちに腰をおろし、二・三人のお女中相手に雑誌類を受け渡ししておる、私は入口に佇んだまゝ彼の用事がすむのを待っていたが、お女中達はかわるがわる雑誌を手に行来する、その手にする雑誌をよく見れば、元和三勇士、寛永御前試合、水戸黄門漫遊記、宮本武蔵、天保武勇伝等々の講談本で、彼は宮内省御用達の貸本屋だったのである。

そのうちお女中頭らしい年増が現われ、彼に向って〝お連れの人か〟と問うていたが、次いで私に〝何か御用ですか〟と。私は大民から御用を承りに参りました、と答えると急に笑顔をつくり。

〝あゝ、それはあの洋館の前を真すぐに行けば広い御庭に出ます、その奥の方に見える母家の玄関にお尋ね下さい、此処はお局（つぼね）寮ですから〟と。

おつぼね寮、それは昔話に聞いた言葉で、大正の御代に現存するなどとは知るよしもなく、奇異の感にうたれたものだった。

こうした感懐は今日でも夢のように、思い出される一駒である。

ところで、其頃はラジオもテレビも無く、従って今日の如く外国ものゝ音楽や演芸など楽しめることは滅多になく、専らお国ものの芸能に頼るしかなかった。そこへ日露戦争以来、士気昂揚の気魄に乗って脚光をあびて来たのが薩摩琵琶で、やがて明治陛下の上聞に達するや、娯楽関係のとぼしい宮城内にも歓待さるゝに至った。

かくてこの栄誉ある琵琶は一般人への関心もたかまり、その演奏会は民心作興上有意義のものとして特別扱の下に、その催しは枚挙にいとまなき有様となった。もちろんその稽古場も又巷に溢れんばかり、世をあげて琵琶ブームの時代が到来した。

薩摩琵琶「柱（こま）の削り方」の研究

日本琵琶振興会　鈴木流泉

京絃編集部の依頼によって、標題の如き記事を載せる事になりましたが、もとより之は、私流の技法の外に出る筈はありません。即ち「参考」までに記するものでありますから、細部は、あくまで読者各位の、之に拠っての「工夫」に期つ次第であります。

△　△　△

先づは箇条書に致します。

一、当然の事ながら、自己の調子に合せて調絃する。

二、柱の上下両角（かど）を、ヤスリ又はノミでわづかに削り落し（つまり、俗に謂う「面取り」のこと）、角の無い一滑りの良い一金具で強く刮摩して、その柱角に丸味をつける（表面も同時に、同じくする）。

◎　右を省いて、「サワリ付け（削り作業）」をすると、柱角に糸がクイ込み「キシミ音」が出、糸も切れやすくなるから、この行程は重要。

更に、予め蠟を施す事も可。

三、張った絃が、柱の表面に平行して触れている事を前定として、柱の下部、その

巾の三分の二を、わづかに（肉眼では識別し難い程度）抵く削り取る。

理論的には、これで第四絃は鳴る。

四、次に、上部柱巾三分の一と、下部との差を、第三、二、一、各絃の順に、少なくする。

たとへば、之を拡大したとして……四の絃が触れる位置に4の差があれば三の絃は3、二の絃は2、一の絃は1或はゼロ……ということ。而してこの数は勿論絶対値ではない。

所詮は、経験を積んで「カン」を養うほかはない。

五、取口は、各絃共に開放音ゆえに、絃の種類による差は生じない。

下部、心もち抵目に削ればよい。

以上

道具

一、平ノミ、又は、突ノミ、四分巾一丁。

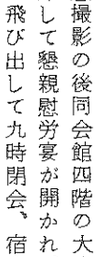
二、平ヤスリ中目、又は、一本目、三分巾一本。一本山も可。

三、削り取り用小刀（厚さ二ミリ、長さ六センチ、巾二センチ程度）一丁

◎ヤスリ中目図解

〃　一本目図解

小刀図解



京都琵琶協会の北海道親善演奏旅行

ばくすい

京都琵琶協会の有志で組織する「旅行会」は、毎年各地琵琶同好団体を訪ねて親善を兼ねた観光旅行を続け、昨年は新潟、佐渡、東京へ、一昨年は東北地方、一昨々年は愛媛県松山市などへ行ったが、今年は北海道旅行を企画し札幌、函館の琵琶人と事前交渉をしていたところ、八月二十四日に北海道神宮琵琶講十周年記念演奏会が開催され、之に京都組が参加する話が纏ったのを機会に、一行十人（戸倉旭嶺、若宮旭登、田中鵬水、梅原旭濤、矢吹旭美津、安住旭康、平井春嶺夫妻、植村寛水夫妻）は同月二十三日（金）朝九時十五分京都発新幹線ひかり号東京行に乗車して勇躍壮途についた。

車中は指定席のため一団となり、小学校の修学旅行のように若返った気分で芸談や世間話などではしゃぎ廻って、約三時間後の東京着も知らぬ間に過ぎ、十四時十分羽田発日航機で札幌に向ったが、機内は誠に快適で積乱雲を遙か下に見下す八千米の高度を時速九百五十キロ、一時間二十五分で千歳空港に到着、小雨を侵して出迎えて下さった内山鶴崇、広川岳楓両氏の案内で宿舎ハイランドホテルに入って一先づ旅装を解き、内山氏経営の料亭天政で夕食の接待を受け、夜は繁華街狸小路、すゝきの等を広川氏が案内して下さった後宿舎に帰り静かな一夜を過ごした。

翌二十四日（土）朝九時宿舎出発観光バスで市内見物をし、明治大帝の御霊を祭る日本一の大鳥居のある北海道神宮や大通公園、時計台、原始林に覆われた円山公園、狸小路などを廻り、藻岩山（もいわやま）では札幌市街を一眸におさめる標高五三一米をロープウエーで登って壮快の気分を満喫したが、特に印象的なのは、一世紀前迄は熊や狸、狼などの横行する未開地であったというこの地が、現在は百二十万に垂んとする人口を擁する十大都市中の札幌市として大厦高楼が建ち並び、而も市内至る所アカシヤ、エルム等の街路樹に覆われて森の都の名にふさわしく、空気も甘くて他都市では見られぬ光景であった。

（その間に我々の琵琶器や必要荷物は広川氏の御好意で総て演奏会場に届けられ、身軽に観光する事が出来大助かりであった。）

半日の観光を終って正午開演の南三条西一丁目大谷会館五階大ホール（八百人収容）に到着、折からの雨にも拘らず聴衆は続々と詰めかけて満員の盛況を呈し、地元琵琶、吟詠の名演技の間に伍して京都組五人（田中、梅原、矢吹、平井、植村）も出演の末席を汚して七時終演、記念撮影の後同会館四階の大広間に約百人が出席して懇親慰労宴が開かれ、隠し芸なども数々飛び出して九時閉会、宿舎に帰った。

滞道三日目の二十五日（日）は朝九時宿舎ハイランドホテルを発ってバスで登別（のぼりべつ）に向う。途中定山渓温泉や、広く青く澄んだ静かな洞爺湖の景観を眼下に眺めつゝ中山峠で少憩、バスの乗客一同と共に記念撮影の後昭和新山に向う。昭和新山は二十数年前平地が突然もり上り爆発して忽ち百数十米の岩山を形造り、今尚白煙濛々と噴き出している活火山で、山麓の売店二階座敷で昼食を摂りながらその素晴しい壮観を鑑賞したあと、わら葺のアイヌの棲家、数軒の土産物店頭アイヌ人の熊の木彫り実演などを見て再びバスで起伏重畳、白樺林立のオロフレ峠を越して標高二百米の登別温泉パークホテルに着いたのは夕闇迫る頃であったが、恰も当日はこの地年中行事の地獄祭りの最終日で街中は人の波、その中を数基の青鬼赤鬼の大きな造り物を、数人の若者が鐘太鼓の噺しに合せて担ぎ廻り、夜は地獄谷附近に櫓を組んで盛んに舞い踊っていた。

登別は北海道第一の温泉郷で、湯元の地獄谷からは硫黄泉の外各種温泉が多量に湧出し、之を数十軒の旅館に引いて泊り客の持病や旅の疲れを医やすのに特効があるという。お蔭で我々も入湯で大分疲れが治ったような気になった。

翌二十六日は十時宿舎出発、白煙を噴き乍ら滾々と湧き出る湯元地獄谷の壮絶さを見て、登別駅発特急北斗二号指定席三時間で函館着駅頭高橋蘇水、西村峡水両氏のお出迎えを受けて宿舎グランドホテルに入り、夕食後右両氏や高橋氏のお弟子の来訪を迎え、高橋氏の「重衡」、西村氏の「吉野山懐古」の名演奏京都側を代表して平井「吉野の奥」、若宮「安宅の関」両曲を提供弾交した。

明くれば二十七日(火)滞道最後の日、午前中タクシー二台に分乗して先づ大森浜に石川啄木の像を訪ねて記念撮影の後五稜郭へ。五稜郭は我国最初の洋式城郭で、明治維新の際江戸を脱した幕府海軍の士がこゝで政府軍を迎え討ち、一ケ月で敗れて榎本武楊、大鳥圭介らが降伏した激戦地として有名で、今は公園となり桜、藤、殊に松の名木多く、城郭をめぐる外濠は清水を湛えボートを浮かべている。

函館山へ向う途中、函館戦争で討死にした

ごあいさつ

津軽琵琶

は現代語を基調とし、平和時代へのイメージチェンジの意図によって生れた名前です。よろしくお願いいたします。

○レコード　三沢の嵐（新曲甲子園名勝負）　500円　送55円
○カセットテープ　河中島（錦心原作、現代語化）　900円　送55円
中野のもみじ（新曲）
○同　石童丸・白虎隊（新曲）　900円　送55円
○同　竜の口　900円　送55円
吹雪の花（新曲）ヤングデース
○同　ジョージワシントン（新曲英文琵琶）　900円　送55円
津軽野の星（新曲、太宰治追悼）
○同　小野田少尉の母のことば（新曲）　900円　送55円
○今様光源氏と世之介　1000円　送115円
（性典であり、聖典でもあると信じる。みだれ髪とともに新婚者への好プレゼントにも。）
○芸園平和の誉　1000円　送110円
（文芸への秘密・創作・エッセイ・詩・歌集・俳句集など）
○吟詩桃太郎のネブタ（普及版）　300円　送115円
（詩吟のふしで歌える日本の新しい詩）
○日本民族の歌声　1000円　送55円
（晶子〜日本武尊作曲独唱）
○みだれ髪　900円　送55円
（心意気の才女、晶子の作品をメロデーにのせる）
○歌声メロデー〝無憂華〟　900円　送55円
（大正・昭和流行名歌唱を歌いつづる）

申込先　(〒030)　青森市中央(二)一十四一十六　柴田富山（電話七七一八〇三三番）

新撰組の副隊長土方歳三の碑があり、高田屋嘉兵衛の像を横手に見つゝ函館山に到着、市街を一望に治め、世界三大夜景の一つとして有名で、山麓の北町は昨年NHK・TV放映の「北の家族」の取材地である。それから市立博物館で資料を展覧し改めて函館市を再認識の後トラピスト修道院に走って、厳しい戒律のもと全てを神に捧げている聖域に額づく――かの女（ひと）は如何なる果てかトラピストの、若き修女のひとみ忘れず――。

こゝから車で五分で函館空港へ一西村、高橋両氏のお見送りを頂き、十三時五分発全日空機で青空の中を一時間十分で羽田着、空港で思いがけなく鈴木流泉氏がお出迎え下され久闊を序して、東京駅から新幹線ひかり号指定席で一路帰京の途につき二十時六分京都駅到着、四泊五日の楽しい北海道旅行を悉なく終って解散したが、滞道中到る処で味った焼蕎トーモロコシ、バター付蒸したてジャガイモ、焼鳥賊の美味は忘れ難く、又関西に比して初秋のようなすがすがしい北海道の気候は快適そのもので心地よく、同じ日本の夏でありながらこんなにも違うものかとつくづく思ったことであった。

擱筆にあたり札幌の広川岳楓、内山鶴崇両師、函館の高橋蘇水、西村峡水両師その他の方々の筆舌に尽くせぬ御配慮御心切に対し、深甚の謝意と敬意を表します。

（札幌演奏会の演者と曲目別頂参照）

（五分間演奏用）

新曲五絃琵琶　山野の名花

高橋旭洋作詞作曲

（夏上開三）梅は匂いて桜は花よ
（中）人は情けの下に住む
（下）峰の小松や岩つゝじ（初音）
（唱歌）さくら〈〈弥生の空は
（琵琶入）見渡す限り霞か雲か　花にぞ匂う
（春上）熱田の紅葉に野田の笛
（中）吉野桜や北野の梅も
（下）盛りの頃は名も高けれど
（七）散りての後は色も香もなし
（六）されど山野の草木は（土天）
（三）枯木を残して年々に――節を待ちて
ぞ亦も咲く
（詩吟）名峰深山知行程　万里青葉見到処
人魂今在透名声　明朝期来全天命
（七）折しも明けゆく東雲に
（夏上）今朝を告げ行く小雀の
（下）今日の苦楽を共にして
（五）明日のよき日を楽しみに
（三）明日のよき日ぞ愉快なり（土金）
（三）明日のよき日ぞ愉快なり（土々天）

東西琵琶人　関東の薩摩琵琶正絃会、関合同一泊会　西の同四明会共催、浜松の同鶴絃会司会で八月十(土)、十一(日)の両日静岡県舞坂町民センターに於て首記弾交会開催。参会者は琵琶人と数人の家族で五十人に垂んとし東海道線弁天島駅集合、会場への途次琵琶の守護神弁天様に参詣。会場は風光明眉の浜名湖畔に新築の瀟洒な洋風四階建で、三十畳和室二部屋をぶち抜いた大広間に舞台を拵ら え小野鶴彦師の健筆になる抽籤出演順の名前と曲目のビラを吊り下げ実に壮観である。

先づ現地小野鶴彦師の挨拶があり続いて左の通り熱演展開。桜井の駅一佐野晃雲　竜の口一小林錦瀞　少女像コレ一一山木岳盛　吉野落(下)一岡部錦蝶　吉野山懐古一松永初心　送別一平井幸生　金剛石一小野しげる　敦盛(初)一八束一峰　物狂一山田岳叢　白虎隊一長谷川博章　王昭君一鈴木鶴岡　富士山一小野ひろみ　弾法合奏一辻靖剛・須田誠舟・清川嵐舟・小村鉾舟　元寇一内藤欧水　虞美人草一石川晃豊　武蔵野一小村鉾舟　赤壁一杉本治作　重衡一岡尾鶴城　潯陽江一古家絃風　桶狭間一伊藤晃嶺　川中島一清川嵐舟　菅公(二)一三上晃城　寂光院一平井春嶺　城山一須田誠舟　詩吟一大富士岳鮮　似我一染谷晃岳　無文禅師一柿沢篁峰　赤星崩(初)一島津天嶺　桜一仲川秀邦　桶狭間一伴野鶴風　城山一青島晃苑　吉野落(上)一小野鶴彦。

以上で第一日弾奏終了懇親会に移り宴酣となるや八十八才の栗本天芳翁が立ち上り剣舞と邦舞を元気に舞って喝采を博し続いて隠し芸続出、笑いと感激と興奮の渦に歓を尽くし十時過ぎ一同寝についた。

第二日は五時半起床、三々五々附近を散策して朝食の後八時から弾奏再開、小松の操(二)一藤崎天光　忠度都落一栗本天芳　威海衛一伊吹正陽　潯陽江一大富士　門琵琶合奏一八束・平井・仲川・小野・古家。以上で全部の弾奏を終了し有志二十六名は折からの小雨をついて十時四十分発の観光船で浜名湖めぐり（瀬戸、寒山寺、弁天島）をして、小野師の特注による書き良い浜松特産萩軸の毛筆をお